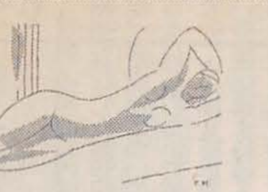
論壇　天皇訪中の是非が焦点　東京新聞-1992.12.15

文化


桝田　達雄・画

大波小波

誤訳の効用

寡作ではあるがきわめてユニークな詩人の阿部日奈子が、「ユリイカ」のコラム「われ発見せり」で、興味深い翻訳論を展開している。

新潮社の旧版カフカ全集で、ある短編に「私はその図形に対して無抵抗だった。その図形はゆったりとテーブルのそばに坐って、テーブルの面を眺めていた」という訳文があった。阿部はながらくこの超現実的な描写に拘泥し、いかにもカフカネスクであると信じていた。この「図形」はひょっとしてゼラチンで出来ているのではないか、などと夢想を重ねていたとエッセイにある。ところがゲルマニストでもある阿部がある時、原文を確認してみるとFigur。つまり「人物」くらいの意味であり、「図形」とはまったき誤訳であったのだ。ちなみに新版全集では「人影」と訳語が当てられている。

阿部の意図はもとより誤訳の糾弾にあるのではない。オドラデクという奇怪な糸巻が人語を操る小説を書いたカフカにとって、「図形」という綺想はいかにも似つかわしい。そこから出発して幻想文学論を展開することにある。

誤訳は時に思いがけぬ奇貨をもたらすことがある。ビートルズの名曲Norwegian WoodをWoodsと勘違いして「ノルウェイ風の調度家具」ではなく「ノルウェイの森」と訳したことから、かのベストセラーも生まれたではないか。（法師）

この1年　論壇

天皇訪中の是非が焦点

PKOなど現実を後追い

中嶋　嶺雄

いま私は、アメリカの西海岸で太平洋を眺めながらこの文章を書いている。ここカリフォルニア大学サンディエゴ校国際関係・太平洋研究大学院（IR／PS）の図書館には、日本の雑誌がほとんど揃っているので、論壇回顧には事欠かない。

海を隔てて改めて日本の論壇を展望してみると、この一年はとりわけ論点が多岐にわたっていたと思う。一方、PKO問題や最近の佐川スキャンダルは、現実の方が先に大きく動いてしまっていて、論壇はそれを後追いしている感がある。

そうしたなかで、本年早々に話題を投じたのは、盛田昭夫「『日本型経営』が危い」（『文藝春秋』2月）だった。国際的な日本企業の経営者が日本企業の体質を自ら問うただけに、内外の反響も大きかったが、一方で島田晴雄「『ジャパン・モデル』は死なず」（同）は、日本型システムの普遍性を探る手がかりを経営学者の立場から示唆していた。

日本型経営論議が沸騰

日本型資本主義についての議論はここアメリカでも盛んであり、私の現在の同僚チャルマーズ・ジョンソン教授も論客の一人であるが、わが国の側にも日米関係を経済を中心に考え直そうとする論議が今年はとくに活発だった。代表的な論文として小宮隆太郎「日米経済摩擦の『非経済学』」（『エコノミスト』3・31）、伊東光晴「日米市場開放交渉の『愚』と『虚』」（同8・18／25）、竹中平蔵「一人歩きする管理貿易」（『THIS IS 読売』8月）などをあげることができる。

バブルの消失という日本経済の現状をめぐる論議の高まりのなかで、宮崎義一著『複合不況』（中公新書）がベストセラーになったことも論壇の話題であったが、では一体、宮沢政権のいう「生活大国」とは何なのか。かねてから日本経済の「いかがわしさ」を警告してきた飯田経夫「『豊かさの先』のモラル」（『正論』5月）は、この点でやはり味わい深い。日下公人「日本発世界一周の政治」（『Voice』1月）、唐津一「日本はすでに生活大国だ」（同8月）とともに読み返されるべき論点である。

経済の不況以上に政治の腐蝕は深刻である。だが、宮沢政権は不人気のなかでなお安泰だともいう。こうした状況を西部邁「溶けていく日本」（『中央公論』6月）は日本型大衆社会への苛立ちとして語り、曽根泰教「保守無党派層は救われない」（『文藝春秋』6月）は政治学者として真摯に告発していた。江藤淳「宰相宮沢喜一論」（『Voice』10月）や久保紘之「逃げる宰相――宮沢喜一氏と戦後知識人」（『諸君！』3月）は、宮沢首相の狡智な不決断の限界を衝いていた。

国際問題では、アジアをどう考えるべきか、が一つの論点であった。深田祐介「日本よアジアを見よ」（『文藝春秋』3月）はマハティール首相の東アジア経済圏構想を肯定的に論じ、長谷川慶太郎「中国を封じ込めよ」（『Voice』11月）は、安易な中国傾斜を戒めている。そうしたなかで、『文藝春秋』や『諸君！』などでの、福田和也の一連のアジア論が注目されたが、それへの武藤光朗の批判も鋭く深かった。

アジア問題は、当然、日本外交の重要な選択になる。この点では、エリツィン訪日中止をめぐるロシア論も多かったが、何といっても今年の論壇の焦点は天皇訪中をめぐる論議であった。この問題では、『産経新聞』がこの春から保守派知識人のあいだの賛成（衞藤瀋吉、猪木正道ら）、反対（小堀桂一郎、村松剛ら）の両論に論争の場を提供し、その延長線上の衞藤／小堀論争「天皇陛下は、今秋中国を訪問なさるべきか」（『諸君！』4月）も注目された。天皇訪中問題を天皇制と憲法との関連で批判的に論じた奥平康弘「憲法からみた『訪中』問題」（『世界』10月）も、一方の石原慎太郎「多くの国民の不安」（『文藝春秋』10月）も、天皇訪中への疑問という点で一致していたのは興味深い。江藤淳「日中戦争は終っていない」（『文藝春秋』11月）も問題を深くとらえていたが、これらの諸点を含む日本外交論としては、拙稿「天皇訪中と日本外交」（『中央公論』9月）がある。

以上の論点のほかに、注目論文として、梶田孝道「『多文化主義』のジレンマ」（『世界』9月）、エンタテインメントとして山崎正和・芳賀徹（対談）「新鎖国論」（『文藝春秋』9月）をあげておきたい。

最後に、今年五月の『朝日ジャーナル』廃刊が話題になった。私もかつてはしばしば寄稿した雑誌だけに感慨深かったが、問題はこの雑誌がいつの間にか激動の同時代史への接点を失ってしまっていたことにある、と私は確信する。まったくアングルの異なる『新潮45』がいま本当に隅々まで読まれる雑誌になっていることと好対照であろう。

（なかじま・みねお＝東京外語大教授、カリフォルニア大学客員教授）

講和條約

戦後日米関係の起点

〈804〉

児島　襄

◆空母も二隻◆　昭和25年

二月二日――

統合参謀本部一行は午後四時、日比谷の放送会館で内外記者団と会見した。ただし時間は「三十分間」に制限され、声明は発表されず、議長O・ブラドレー大将、陸軍参謀総長J・コリンズ大将、海軍作戦部長F・シャーマン中将、空軍参謀総長H・ヴァンデンバーグ大将にたいする自由質問が許可された。

問答の中で目立ったのは、次のようなものであった。

〈問〉陸軍は極東の安定勢力としての地位を保持するために、日本の基地を恒久的に確保するつもりか。

▽コ大将　米軍の日本駐留期間の問題は講和条約できめられる。日本における米軍は正しい軌道にのっており、極東の安定勢力になっていることを確信している。

〈問〉ソ連は極東方面の海軍力を重視しているようだが、米国も太平洋艦隊を増強するのか。

▽シャ中将　可能な限り増強したい。大西洋から巡洋艦、駆逐艦をまわし、空母も常時二隻は配置するつもりだ。

〈問〉在日陸、空軍も増強するか。

▽ブ大将　一般的にいって日本の占領軍を増強する必要はないし、目下その計画もない。

〈問〉日本は米国の国防に役立つか。

▽ブ大将　われわれの国防戦略をばくろするような質問には答えられない。

〈問〉対日講和条約の締結後に日米軍事同盟が結ばれるという噂があるが、これも太平洋防衛作戦の一環をなすものか。

▽ブ大将　それは純然たる政府の問題だ。統合参謀本部としては考えていない。

〈問〉憲法で武器をすてた日本の防衛はどうなるのか。

▽ブ大将　日本が防衛されるかどうかは、講和条約で最終的に決定される問題である。講和後は日本自らがきめるものだと　考

ミケーネ文明は、紀元前一五〇〇～一二〇〇年頃、ギリシアのペロポネソス半島で栄えた。シュリーマンが発掘した遺跡は、アルゴス平野を見下ろす小高い丘の上にある。

このミケーネ文明は紀元前一二〇〇年頃、突然滅亡する。その滅亡の原因について、これまでドーリア人の侵入・破壊説、海の民の襲来説、地震災害説、疫病の流行説、奴隷の反乱による内部崩壊説、人口過剰説など様々な説が提示された。いずれも決定的なものとはなりえなかった。

今年六月、東京で、文部省重点領域研究「文明と環境」の第六回公開シンポジウム

が開催された。
ムのテーマは「
環境」。そのシン
中で、考古学者

者がこのミケー
壊した紀元前一
の地球環境の変
盛衰について白
たたかわした。
ムの討論の成果
現時点における
るミケーネ文明
について考えて
ミケーネ文明
に強く依存し
た。経済的基盤
中海貿易に、船
った。船の材料
である。輸出品
の青銅器や陶器
を作るためにも
大量の薪が必要
だった。貿易で
富をたくわえた
王は、きそって
巨大な王宮を建
築した。王宮の
天井を支えるに
は巨木の梁が必
要だったし、柱
や壁や床の内装
にも材木がふん
だんに使用され
た。都市市民の
の新にも大量の
った。
近年の筆者ら
ソス半島の花粉
は、ミケーネ文
るはるか以前の
土の中からは、

文豪の日々

谷崎潤一郎 ――七の章・『瘋癲老人日記』前後――

④

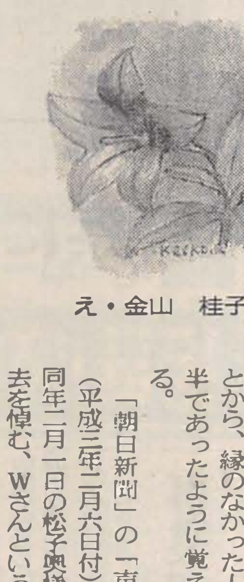
伊吹和子

お手伝いさん候補

借家の候補は、どれも皆、帯に短し襷に長しで、先生の注文に適合するような物件はみつからず、東大病院退院後の十二月下旬、先生がお帰りになったのは、やはり伊豆山の雪後庵であった。付記すれば、先生がここをお離れになったのは、結局まる二年余り後の、この邸を売却なさった昭和三十八年四月である。野村尚吾氏の『伝記谷崎潤一郎』には、伊豆山に移ってから足かけ十年目になる「昭和三十八年、『台所太平記』を脱稿したころから、潤一郎はまたもや転居を思うようになった」とあり、その理由は「創作の気分転換ということもあったろうが、もう一つは心臓発作を予防するために、全家屋に冷暖房の完備した居所を望んでのことだった。冷房はともかく、暖房は全館完備でないと、発作をおこしやすいと心配したからである」と記されている。しかし実は「転居を思うように」なられたのは、三十五年の発作直後からであり、一度はそのまま納まったように見えた先生の希望は、くすぶり続けていたのであった。

面接後も続いた交流

湯河原の家を新築なさった時には、野村氏の記述とは逆に、暖房は伊豆山の家でも十分行き届かせているが、この日本建築では冷房ができない、これまでは自然の風通しで、夏場を何とか凌いで来る事が出来たが、これからは暑さを怺えるのも心臓に悪い。かと言って、各部屋にクーラーをつけたのでは効率も芳しくなく、第一、涼しい部屋から暑い廊下へ、そしてまた涼しい部屋へ、という具合になって、余計に体をいじめることになる。新しく建てる家になら、全体にその設備が出来る……というわけで、ちょうどその頃からクーラーが普及し始め、一般の邸宅でも、四季を通じての全館エア・コンディション完備が可能になったのを、取り入れることになさった――というのが、私の記憶である。


え・金山　桂子

さて、東大病院に入院中、先生は、毎日ベッドの上でお手伝い志望の手紙を眺めるのを、慰みにしておられたが、退院後の銀座東急ホテル滞在中、何人かの候補者を呼んでお会いになった。ただ、勤務地が熱海なのと、仕事の内容の詳細と志望者の思わくとが合わない、というようなことから、縁のなかった人が大半であったように覚えている。

「朝日新聞」の「声」欄（平成三年二月六日付）に、同年二月一日の松子奥様の死去を悼む、Wさんという七十三歳の女性の投稿が掲載された。Wさんの、当時高校二年生の娘さんが、週刊誌の「家事手伝い募集の記事」に応募し、東京で先生夫妻に会うことになって、Wさんも付いて行った、とあるから、それはこの東急ホテル滞在中のことであったに違いない。ここには続けて、「先生は奥様に甘える好々爺（こうこうや）という感じでした。奥様がやさしく間をとりなしてくださるので、硬くなっていた私も娘もよくお話できました」とあり、話はまとまらなかったけれども、後々まで「お手紙」による励ましを頂いたと記されて、「奥様のご逝去を知り、他人の一少女に、心をかけてくださった先生と奥様の温かさを忘れることはできません。心からごめい福をお祈りします」と結ばれている。

夥しく寄せられた応募の手紙のすべてに、私は、断りや、面接の連絡や、面接後の挨拶などをたて続けに書いたことを覚えている。先生からの「お手紙」は、あるいは私の代筆のものであったかもしれない。

（いぶき・かずこ＝元編集者）